

日本女子サッカーにおける「男らしさ」の研究 —早稲田大学ア式蹴球部女子部の現状から分析—

Study of “masculinity” among women’s football in Japan

1K05A107

指導教員

主査 寒川恒夫先生

澤 夏美

副査 石井昌幸先生

序章

ここでは研究の動機と目的、そしてその方法論について述べる。日本の女子サッカーは近年、目覚ましい成長を遂げてきているといえる。しかしながら、なでしこリーグの人気低迷をみても明らかなように、日本の女子サッカーはレベルの向上に人気・注目が伴わないことが伺える。私は、何故そのようなことが起きているのか、その要因は何なのかを追及したいと考えた。私がサッカーを14年間してきて、その経験から、それは日本女子サッカー界に根強く残る「男らしさ」が影響しているのでは無いかと考え、日本女子サッカーの「男らしさ」を研究することにした。これにより、日本女子サッカーの性格を明らかにし、これからの発展に必要な要素を発見できることを期待したい。女子サッカー選手の「男らしさ」について分析を行うため、早稲田大学ア式蹴球部女子部を対象に参与観察を行った。

注目していくのは、競技外・競技内の「男らしさ」もしくは、対関係にある「女らしさ」である。分析の実施期間は、2008年9月～11月である。競技内の分析は試合のVTRを見ることにし、トップチームの主要な試合から、2008年9月～11月に行われた第17回全日本大学女子サッカー選手権大会関東予選大会兼第22回関東大学女子サッカーリーグ戦の、対日本体育大学、対神奈川大学、対筑波大学、対武蔵丘短期大学を見る。先発メンバー以外で行った練習試合から、2008年10、11月に行われた対FC. PAF、対日本女子体育大学抜粋した。競技外は10、11月の練習前後の選

手を観察する。

第一章

世界と日本の女子サッカーの起源と歴史について述べる。サッカーは元来、男子を中心としたスポーツであった。1920年頃のイギリスでは女子サッカーを認めなかったし、日本でも女性がサッカーをすることに反対する歴史が残っている。サッカーが男性のものであるという社会の認識は長年に渡ってなされてきたことがわかる。

第二章

本章と次章ではア式蹴球部女子部に所属する選手の「男らしさ」を分析する。分析にあたり、〈動作・仕草〉、〈言動・言葉遣い〉、〈ファッションと色作り〉の三点に分けた。まず本章は、競技中の分析を行う。これを分析するために、トップチームの主要な試合と先発メンバー以外で行った練習試合のVTRを用いた。分析から、サッカー自体が持つ「男らしさ」の要素が明らかとなった。

第三章

競技外の選手を観察し、分析する。前章に引き続き、三点に分けて分析を行う。ここではサッカーが無い場面で競技中にみられるような「男らしさ」が見られるのかどうかを観察した。そして、女子サッカー選手がおかれている環境が男性を意識することが無いために、男らしいことに抵抗がないことが明らかになった。

結章

これまでの分析をまとめ、日本女子サッカーの「男らしさ」と女子サッカーの発展について述べた。女子サッカーにおいては、競技特性の「男らしさ」が求められる一方で、「女らしさ」も求められており、選手の間には葛藤が生じている。サッカーをすることで「男らしい」と認知されることは、その競技の特性と社会が作り上げたジェンダーの歴史が影響していること、文化的要因が非常に強く、必然的なものであった。そして、必然的に作られる競

技中の「男らしさ」は、女子サッカー選手を男らしい様にする第一歩となっているのであった。女性が男らしく振舞うことは、一般的には認められにくいですが、それを可能にしたのが、男性の存在がほとんどなかった環境と露出度の少ない環境であったことがわかった。今後は、サッカーを女性のものに変えていくこと、女子サッカーを開けた世界にするためにメディアに露出していくことが必要になるだろう。私はそのような環境が日本に整えられることを望みたい。